「大学の再定義ー巣立ちの礎としてー」『現代のことば』京都新聞・夕刊 1面　2017年4月26日

現代のことば

大学の再定義

―巣立ちの礎として―

稲賀（いなが） 繁美（しげみ）

大学のみならず教育を取り巻く環境は急速な変貌を遂げている。インターネットの発達とともに、出来あいの知識を教壇から切り売りすることには、もはや価値はない。高等数学のように教師の手助けがないと先に進めない科目、あるいは語学のように習得に積み重ねが必要な科目も、遠距離学習教材での代替に目途（めど）が立ってきた。計算機と自動翻訳が発達すれば、一握りの数学者や語学者以外は、もはや高度な知識を頭脳に蓄積せずとも、必要に応じてクラウドにアクセスすれば済むようになる。

アルバイトで学費と生活費を稼ぐのが大学生活の実態というなら、むしろここにこそ、社会生活のための実習の機会が豊富にある。とりわけ留学生にとっては、生きた日本語学習と日本社会の生活習慣をいや応なくたたき込まれる。となると今や、大学にはいかなる意義が残るというのだろうか。

筆者はかつて大学入学初年度の一般教養課程の学生に、関心に応じてグループを構成し、自分たちの設定課題に挑み、役割分担して成果達成を図るという授業を数年間、実験的に実施した。こうした試みは現在では広く行き渡り、インターネットも未発達だった当時と現在では、社会環境も大きくかわった。平田オリザ氏の『下り坂をそろそろと下る』にもそうした実践例が豊富に紹介されている。

各地でさまざまな取り組みが、すでに実を結び始めている。それを改めて実感させられたのが、昨秋、北九州市で開かれた第3回アジア未来会議だった。渥美国際交流財団の支援でかつて日本留学を果たした多くの若い研究者たちが一堂に集い、故国や就職先での研究教育の成果を披露する。

通常の学会とは違って、社会貢献のための脱領域的な取り組みの可能性が評価され、専攻を限定しない学際的交流が目指される。多くの分科会のうちわずかな発表に接しただけだが、アジア各国を中心とする若い世代の国境を超えた切磋琢磨（せっさたくま）には、久方ぶりに明るい未来への指標を見た心持ちだ。

ひとを束ねるのは、金銭だけではない。ひとつの財団からの奨学金の給付が、国籍や文化、宗教の違いを超えて、これだけの国際的連帯意識を育んでいる例を、筆者はほかに知らない。

国家間の外交上・政治上の緊張が危機的な状況を醸している現在、アジアの未来と平和の鍵は、国境の枠を超えて「同じ釜の飯」の連帯感に結ばれた若者たちの質と量にかかっている。通訳が必要ならば自ら買って出る姿勢が、意思疎通には不可欠だ。行政と市民と、学者と社会とをつなぐ靭帯（じんたい）の役割を担う人材が、ここから生き生きと活躍する。それを核に地域がその特性を生かし、さらなる人材を呼び寄せる。それがひいては地域経済の活性化にもつながる。

都道府県自治体単位での人口動態や経済指標では計測できないネットワーク、国民国家の枠にはとらわれない新たな社会は、ここからおのずと成長を遂げることだろう。そうした社会刷新の苗床あるいは巣立ちの基として、大学を再定義する潮時を迎えている。

（国際日本文化研究センター副所長・総合研究大学院大学教授併任、比較文化・文化交流史）